
メディカルエンジェルナナリー

池田 南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メディカルエンジェルナナリー

【Nコード】

N1559Q

【作者名】

池田 南

【あらすじ】

ナナリーが医療人を目指して頑張っていくお話です。

ナナリー看護師を目指す！！（前書き）

コードギアスのキャラクターに、破壊する道だけではなく、医療人として人を救っていくのは面白いんじゃないかと思い作りました。

ナナリー看護師を目指す！！

「お兄様！！」

今日も元気なナナリーは、二階からパタパタと私がいるリビングへ、なにやら重要そうなファイルを持って駆けてきた

「お兄様！！お兄様は私の白衣を見たくないですか！？」

…朝からこの妹君は何を言っているのだ？

そりやここまで兄に貢献してくれるパーフェクトな妹を持つ私としては、白衣以外にも、スク水や浴衣（着崩れver.）、果ては下着姿と、どんな姿でも見たいに決まっている！！

最近お風呂一緒に入ってくれないから、なおさらだ。

しかし、最近やっとナナリーは胸が出てきたな…

もし私が、通っていた専門学校でなんとなく意気投合したカレンと結婚してなければ、まだ一緒にお風呂に入っていたかもしれないのに…

「お兄様！！聞いてま…って、どこ揉んでるんですか！？」

「んが！！わ…私はいつの間に…！！」

気がつくとなナリーの胸をぶにぶにしていた。

…柔らかい…

先ほどまでリビングにいたカレンが洗濯物を干している最中で良かった。

「それでナナリー、私に白衣を見せてご奉仕したいと言うのは本当か！？」

ぶにぶにぶにぶに…

「誰もそんなこと言ってませんわ。」

それよりお兄様、このパンフレットを見て頂けますか？」
ぶにぶに…

私はナナリーに渡されたパンフレットを片手で器用に開く。こんな時に片手が塞がっているのは全くもって不便だ。

「はい。」

語り始めたナナリーの顔が赤くなる。そうか、これから私に積年の感謝を伝える気だな？

気がつくとい私の目も充血してきた……

「大丈夫だナナリー、いくら涙でナナリーの可愛い顔が崩れようとも、私はナナリーを愛し続けるよ。」

「逃げる？おお！！そうか！！やはりあの鬼嫁がいる建物の中はイ

ナナリーも言うようになったな！！ハハハ… 『ハハハ…』

…いまなんか私以外の笑い声が聞こえた気がするが…ナナリーは相変わらず顔を赤くして下を向いているし…はっ…

「まさか……」

後ろを振り向くよりも早く、『腐霊矢——!!——!!』という掛け

声と共に、胸椎が破壊されたことに気付いた。

「うがー！！！！」

わ…私の胸椎が…

破裂骨折…ありえ…ない…」

意識が朦朧とする…

だがこの発達途上の胸を揉みながら死ねるなら本望…

ぶにぶにぶにぶに…

「まーだーもーむーかー！！！！！！」

今度は頸椎目掛けて腐霊矢が投下されそうになる

「お…お義姉様！！やめてください！！あの…私が誘ったんです！！」

腐霊矢は投下ポイントを見失い、我が妹に向き合う

「ナナちゃん、そんな庇わなくていいんだよ？こんな妹に手を出す犯罪者なんて…」

それに多分、こんなことされながらも、今コイツの頭の中は『もしナナリーが誘ってきたら』っていう妄想しかしてないだろうし」

…正解だ

「いえ、お兄様をかばったのは私のためなんです！！

私…お兄様がいないと…」

お…おお…ナナリー…やはり私のことを…！！

今の時代血の繋がりなど大した問題ではない！！さあ！！わたしの胸に「学費を払って貰えないじゃないですか！！」

ナナリー！！

スザクレベルの裏切りが出たよ…そりやもう…クルルギ神社でのスザクくらいのが…

でも今は、土の味はしない…血の味とカーペットの舌触りしか分からない…

カレン背中乗って重いし…

その後、ナナリーの爆弾発言にカレンは大爆笑し、私はその日、王の力に目覚めた。

私がこの世界に旅立っている最中に、カレンが必要書類に色々と記載し、はれて来年から専門学校に通えるようになったのだった。

ナナリー看護師を目指す！！（後書き）

これからどんどん病気をぶっこんで、医療小説にしていきたいと思
っております。

子供のケガ

「ナナちゃん！！あっち行つたよー！！」

「よし、とつた！！そっち飛ばすよー！！」

カレンお義姉様直伝、必殺：腐霊矢シュート！！」

こんにちは、ナナリーです。

私はいま、近所の小学生のジノちゃんとサッカーしてます♪

実は私、この春から専門学校に行くことになりました！！

看護師になるために行くのですが、実はまだ、その学校の見学に行つてないんです…

面接だけで受かってしまったので、キャンパスに何があるかすら分かりません（汗）

まあ、そんな不安なんて気にせず、今日から高校は自由登校なので、こうやってジノちゃんとサッカーしてるんです♪

「ナナちゃん、もっと手加減してよー！！」

「あれー？ジノくんは強くなって私のナイトになるんじゃないかなかったのかな？」

これじゃあスザク君が私のナイトになっちゃうのかな？」

ジノくんのお兄ちゃんのスザク君。

実は彼はお兄様と喧嘩しまくって、『僕がナナちゃんを育てる！！』っていつて私を拉致つたことのある、熱血中学生ですww

「ぜつ…全然平気だもん！！あんなへなちょこシュート！！」

もっと強い打つて来なよ！！」

私はいはい、と内心ジノくんの子供ながらの可愛さに心を打たれながら、ジノくんに分からないように少し手加減してシュートした。『ほら、ナナちゃんの腐霊矢シュート敗れたり！！おなじ技はもう効かないよー』

勝ち誇つたようにジノくんがボールの上にバランスよく立つ。

「ジノくん、そんなボールのうえに立つたら危ないよー」

ジノくんは私に強気で『へーきへーき』といいながら、上半身だけリズムにのり踊り出した。

ダンシングベイビーみたいで可愛い（ε）

そんなジノくんをしばらく見ていたら、後ろから学生服を着たスザク君が見えた。

「あつ！！スザク君！！！」

私が叫ぶと同時に、スザク君が駆け寄ってくる。今日は柔道部は休みなのかな？

ジノくんもスザク君を見るために振り向…こうとした瞬間、ボールから落ちた！！

右の肩を強く打って、その衝撃で頭を強くうつ。

私とスザク君の刻が一瞬止まり、動き出した瞬間に、私はジノくん to 駆け寄った。

「大丈夫！？ジノくん！！！」

ジノくんは一瞬なにが起きたかわからなかったが、すぐに笑顔で『へーきへーき』と答えた。

後ろではスザク君がなにやらジノくんをおちよくっていた。

それに少しムツとなりながらも、これが男の子のコミュニケーションなんだな、と思いながら、ジノくんを起こそうとした

「な…ナナちゃん、僕は大丈夫だから、お兄ちゃんを倒してきてよ」ジノくんは地面にぶつかっていないほうの手で人払いをする。

その行為に私思いのスザク君は腹を立て、ジノくん to 近づき、胸ぐらを掴んで無理やり立たせた。

「こらジノ！！お前、ナナリーに向かって何し「ギャー！！！！！！」」

突然ジノくんが叫びだし、かたを抱えるようにうずくまり、首をぶ

つけた方に傾けた。

「じ…ジノ!?」

「ジノくん、大丈夫!?!」

私はジノくんを抱きかかえる。

ジノくんは私の抱っこが好きなので、これで泣きやんでくれるかな、
と思い…

「ナナちゃん、おろして…痛い…」

ジノくんの顔がみるみる青くなる

私はスザク君に近くで接骨院を開業しているお兄様を呼んできて欲しいと伝えた。

いつもならお兄様に会った瞬間、目が腐るとかいつて目薬を使いまくるほどお兄様が嫌いなスザク君だけど、今回ばかりは素直に聞いてくれて、すぐさま接骨院に走った。

とりあえずわたしはお兄様がくるまでの間、いつ意識がとんでもおかしくないジノくん、いまの状態を出来るだけ答えやすいように質問したり、私の上着を着せてあげて出来るだけ暖めたりしてあげた。

しばらくして、女の人の声が聞こえた。

「ナナちゃん!?!ジノくん!?!大丈夫!?!」

カレンお姉様がお兄様の代わりに来てくれた。

お姉様はお兄様と違って鍼灸師なので、おそらくけど、ジノくんの骨折は治せない。

でも、お姉様の後ろから、今年柔道整復師の資格を取った千葉さんが駆け寄ってきた。

「ナナリーさん、この子はどうしたの?」

千葉さんは私にジノくんの症状を聞いた。ジノくんにはらない負担

をかけないためだろう。

「はい、実は…」

私はこれまでのいきさつを全て話し、話し終わった後に、千葉さんはなにやら考え事をして、結論を私に伝えた。

「この子は鎖骨を骨折しているな。」

とりあえずそれは今すぐに治す。ブリタニアさん、少し手伝って頂けますか？」

そう言ってカレンお姉様と千葉さんはすぐに整復に取りかかる。

鎖骨の骨折なのに腕を触ったりしたのがよく分からないけど、これから私も勉強するんだからと思い、質問はしなかった。

「…よし、よく頑張ったね。これで骨折は治ったよ。」

「ナナちゃん、ちよつと…」

わたしはお姉様に呼ばれ、抱っこしていたジノくんをスザク君に渡し、みんなと少し離れたところでお姉様と話した

「骨折は確かに整復したけど、頭を打ったのが気になる。」

多分それをジノくんと言ったら、絶対強がって意地でも病院に行かないだろうから、しばらくジノくんを抱っこしたままでいてくれないかな？

まずはルルーシュに病院の紹介状を書いてもらいたいから接骨院に行くけど、そのあとアーニヤに車で病院に連れてって貰うから。」

「はい、わかりました。じゃあ、少し待っていてください。」

私はもう一度ジノくんに近づき、痛かったら言ってねと伝え、優しく抱っこする。

終始スザク君が羨ましそうにみてたから、あとで一緒にお風呂にも入ってあげようかなwww

そんなこんなでジノくんには特に異常はなく、少し骨折したところが触るとわかってしまうけど、お兄様の術後の献身的なりハビリのお

かげで、しっかりと元に戻った。

でもこの事件が、私の人生を少しだけ変えてしまうことになるなんて、私は思いもしなかった。だけど、その時の接骨院の先生たちは、なにやら気がついていたようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1559q/>

メディカルエンジェルナナリー

2011年1月15日21時46分発行